

薬売りの少年

小川未明

青空文庫

荷物^{にもつ}を背中^{せなか}に負^おつて、薬^{くすり}売^うりの少^{しょう}年^{ねん}は、今日^{きょう}も知^しらぬ他^た国^{こく}の道^{みち}を歩^{ある}いていました。北^{きた}の町^{まち}から出^でた行^{ぎやう}商^{しょう}群^{ぐん}の一人^{ひとり}であつたのです。

霜^{しも}解^どけのした道^{みち}は、ぬかるみのところもあるが、もう日^ひの光^{ひかり}に乾^{かわ}いて、陽^{かげ}炎^{ろう}の上^のつているところもありました。村^{むら}はずれに土^ど手^てがあつて、大^{おお}きな木^きが立^たつていました。かさのように枝^{えだ}を空^{そら}へ拡^{ひろ}げていました。

「なんの木^きだろうな。」

少^{しょう}年^{ねん}は、よくこうした景^け色^{しき}を見る^みのです。ゆくとところ、どこにも同^{おな}じような村^{むら}があり、人^{ひと}が住^すんで、笑^{わら}つたり、怒^{おこ}つたりしていると思^{おも}うと、なんとなくこのあたりの風^{ふう}景^{けい}を見^みてもなつかしいのでした。そしてここにはもう春^{はる}がきていて、木^きの下^{した}には、青^{あお}い草^{くさ}が芽^めぐみ、紫^{むらさき}色^{いろ}のすみれの花^{はな}さえ咲^さいているのが、目^めの中^{なか}に入^{はい}つたのです。

少^{しょう}年^{ねん}は思^{おも}わず、故^こ郷^{きやう}の方^{ほう}を振^ふり返^{かえ}りました。青^{あお}空^{ぞら}遠^{とお}く雲^{くも}は流^{なが}れていて、もとよりその方^{ほう}角^{かく}すらたしかでなかつたが、曇^{くも}り日^びがつづき、冷^{つめ}たい雪^{ゆき}が降^ふつていることと思^{おも}われました。彼^{かれ}は、青^{あお}草^{くさ}の上^{うえ}へ腰^{こし}をおろそうとしたが、そばに小^{ちい}さな茶^{ちや}店^{みせ}があるのに氣^きづいたので、さつそく入^{はい}つて腰^{こし}掛^かけへ休^{やす}みました。

「いらつしやいまし。」と、おかみさんが、愛想よくお茶を注いでくれました。

「この村へ、薬屋がやってきましたか。」と、少年は、たずねたのであります。

「あなたは、お薬屋さんですね？」と、おかみさんは、少年を見ました。

「そうです。どんな薬でも持っています。今年置いてゆきまして、来年またまいりますときに、お使いになった薬のお代をいただくのですが、どうか、ここへも一つ置かしてくださいませんか。」といって、薬売りの少年は、頼みました。少年は、おかみさんが、どういふだろうかと心配しながら返答を待ちました。

「よろしゅうございますよ。このへんは、町へ出るには遠いし、お医者さまもない、まことに不便なところですから、万一の場合に困ってしまいます。私の家ばかりでなく、きつと喜ぶ家がありますから、このへんをお歩きになつてごらん下さい。」と、おかみさんは、しんせつにいつてくれました。少年は、いいところへきたと思つて、たいそう喜びました。

「こちらは、暖かでいいところでございますね。」

少年の目には、おかみさんから、やさしい言葉を受けたので、土地までが、和やかな慕わしいものに感じられたのでした。

「気候はいいが、さびしいところですよ。」

行商人は、かえって汽車などの通らないところ、町のないところ、不便なところ

ほど、得意を造るのに都合がいいとされていましたので、少年とて、不便やさびしい

ということとは、覚悟でありました。ただ、こうして歩いていて、ありがたくも、うれしく

も、また悲しくもしみじみと感ずるのは、人の情けであると思いました。

少年は、その茶店から出て、おかみさんに教えられた道の方へ、荷を負つて、と

ぼとぼと歩みをつづけたのです。

松原へつづいている小道で、一人の少女がしきりに下を向いて、なにかさがして

いました。

「この松原の奥にもお家がありますか？」といって、薬売りの少年は、たずねた

のです。女の子は、両手についた砂をはらって、少年の顔を見ました。

「ええ、ずっと奥の、がけの上に一軒家があつてよ。」といいました。

「一軒きりですか？」

「ええ、一軒だけ、そして、たった一人だけ住んでいるの。」

「一人だけですか……。」

「先生が一人住んでいるの、変わった人なの。」

「どんなに変わっていますか？」

「そうね、よく知らないわ。おもしろい人ね。」

少女は、笑って、こう答えると、また下を向いて、なにか草をさがしていました。
「嫁菜をつんでいるのですか？」と、少年は、道ばたの青い草を見ました。

「いいえ、おんばこをさがしているの。」と、少女は、答えたのです。

「おんばこをさがして、なんになさるのですか。」と、少年は、きました。

「せきのお薬にするのよ。兄さんが、せきをしてなおらないのですもの。」

「ああ、せきの薬ですか、せきのお薬なら、私がいへんきくよい薬を持っています。」
と、少年は、いいました。すると、少女は、驚いたふうで、少年をながめ
ました。

「あんた、お薬屋さん？」

「ええ、私は、薬屋ですよ。いい薬を持っています。あなたのお家はどこですか？」と、
少年は、いったのでありました。

「おじいさんに聞いてみるわ。私の家はあすこなのよ。」と、少女は、先になつて、

小道^{こみち}を走^{はし}つていきました。薬^{くすり}売^りの少^{しょう}年^{ねん}は、すこしおくられて従^{したが}いていくと、

「おじいさん、お薬^{くすり}屋^やさんをつれてきた。」と、いう声^{こえ}がきこえたのでした。その家^{いえ}の周囲^{しゅうい}は、桃^{もも}の木^きの林^{はやし}になつていました。鶏^{とり}小^こ舎^やがあつて、鶏^{にわとり}がのどかな声^{こえ}でないていました。おじいさんの前^{まえ}へいつてあいさつすると、

「年^{とし}の若い薬^{くすり}屋^やさんだな、いくつになるかな。おお、うちの孫^{まご}より五^ごつは多いが、感^{かん}心^{しん}なこつた。孫^{まご}もその年^{とし}になつたら、独^{ひと}りで船^{ふね}に乗^のつて、父^{ちち}親^{おや}のいるハワイへいくことがでさるだろう。孫^{まご}も、かぜをひいて、せきがなかなかしつこくて困^{こま}つているが、よくきく薬^{くすり}があつたらもらつて、すぐ飲^のみましょう。」と、おじいさんは、かわいい孫^{まご}のこ

とで、心^{こころ}がいつぱいだつたのです。

薬^{くすり}売^りの少^{しょう}年^{ねん}は、荷^にを下^おろして、薬^{くすり}を出^だす間^まにも、自^じ分^{ぶん}にもこんなやさしいおじいさんがあつたらば、と思^{おも}われるのでした。

「このお薬^{くすり}をあけてください。せきによくききますから。」

この声^{こえ}をききつけて、臥^ねている男^{おとこ}の子^こは、

「ありがとう。」と、薬^{くすり}売^りの少^{しょう}年^{ねん}の方^{ほう}を向^むいて、お礼^{れい}をいいました。まくらもと

の壁^{かべ}には父^{ちち}親^{おや}がいつている、ハワイの風^{ふう}景^{けい}の写^{しゃ}真^{しん}が貼^はられていました。

「坊ちゃん、早くなおってください。」と、少年がいました。

「また、来年きてください。僕、待っているから。」と、臥ている、男の子がいました。

「きつと、まいりますよ。」

少年は、振り返って、あいさつしながら、出ていくと、後ろ姿を少女とおじいさんが見送っていて、

「気をつけて。」と、おじいさんが、いつてくれました。

少年が、がけの上にあるという、一軒家をたずねていったのであります。それが、自分の職業であるうえは、たとえ一軒といつても捨ててしまうわけにはいきませんでした。小さな門があつて、開けると、二、三人の子供が花壇のところで、遊んでいました。小さな門が吹く風が暖かなせいか、もう、ヒヤシンスが咲き、すいせんや、フリージアなどが見送っていました。

「だれかきた。」と、一人の子供が、いいました。

「いま、先生は、お留守ですよ。」と、他の子供が、少年を見ていいました。

「薬売りですが、お留守ですか。」と、少年は、いつて、恍惚として、かなたに

輝く青い海をながめたのです。

「カナリヤにやる、はこべを採りにいらしたのだからすぐお帰りになるわ。」と、女の子がいました。

「いい景色ですね。」と、思わず口に出して、薬売りの少年は、がけつ鼻の方へ歩きました。

「この家は、あぶないのだよ。先生は、変人だから、人の住まない家に住んでいるのだ。」と、一人の子供が、いいました。薬売りの少年は、おんばこを摘んでいた少女が、いった言葉を思い出したのです。

「どうして、変人なんですか？」

「だって、がんこなんだから、人があぶないといっても平気でいるからさ。けれど、先生は、僕たち子供だけはかわいがってくれるよ。」

「いい人ではありませんか？」

「それは、いい人さ。けれど、大風が吹いたり、地震があつたりしたら、この家は、がけがくずれてひっくり返るかもしれない。そうすれば、僕たち安心して、本を習うこともできないだろう。」と、子供が、いいました。

薬売りの少年は、下を見るとはるかに波が岩に碎け、日の光が射して、美しい虹を描いています。なるほど、がけの下まで、土は削り落とされて、五色に彩られた潮の匂う海が迫っていました。汽船がいくとみえて水平線に、一抹の煙が上り、沖の小島には、夜になると煌々として光を放つ燈台が、白い塔のようにかすんでいます。

「あれは、燈台ですか？」

「そうだよ、あの燈台の明かりは、先生のお家の座敷へ入るのだよ。」

「坊ちゃんたちは、日本海の冬の海を知らないでしょう。それは、すごいですよ。」と、薬売りの少年がいました。

「そうかい、そんなにすごいかい。けれど、台風がくるのは、たいていあちらの南の方からだけ。そのときは、大きな風が吹いて、波も高いのだよ。」

「なるほど、台風がきますね。」

少年は、沖の方を見て、茫然としていますと、そこへ、先生が片手にはこべを持っ、門を開けて入ってきました。

「おまえは？」

先生は、けげんな顔をして、少年の前に立ちました。

「私は、薬売りですが、この後ごひいきにさせていただこうと上がりました。」と、少年は頭を下げました。

「ここには、病氣にかかる人はいないよ。」と、先生はそつけなくいつて断りました。「でも、万一ということがあります。どうか一袋置かしていただきます。」と、少年はもう一度頭を下げました。

「薬など置いていかれると、病氣を引き起こすようなものだ。いらないからさつさと帰ってくれ。」と、先生は少年をしっかりとつけるようにいいました。薬売りの少年は、なるほどがんこな人だと思いました。そして、こういう人は、話し相手もなく独りぼっちでいて、どんなに寂しきろうと想像されたので、

「お一人でいらしつて、お心細いことはありませんか。」と、少年は、いったのでした。

「なんの、さびしいことがあるものか。人の声を聞きたいと思えばラジオがあるし、カナリヤは、一日じゅうこの窓でさえずつているし、ここは、前が海だから、台湾、上海、ハワイ、どこのラジオも手に取るように入ってくるのだ。」と、先生は、海原を見やつて、誇らしげに語つたのです。

「ハワイからのラジオも聞こえますか？」

「夜の十時ごろには、手に取るようによく聞こえる。」

先生は、はこべをカナリヤにやろうとして窓のところへ近づきました。

「あ、カナリヤの足から血が出ていますよ。」と、薬売りの少年は、おどろいて、叫びました。

「ねずみか、からすにやられたとみえる。このあたりに、悪いからすがいるからな。」

先生は、案外カナリヤの痛々しい傷を見ても平気でした。

「かわいそうに。」

少年は、こういつて、荷物の中から、傷薬を取り出しました。

「おい、薬なんかいらないよ。」

「いえ、お代をいただくのではありません。ちよつとこれをつけてやってください。」

少年が、白い塗り薬を出すと、

「おまえは、なかなか感心だ。」と、先生は、機嫌がよかったのです。少年が、

ここから去ろうとすると、

「お薬屋さん、また来年くるの？」と、子供たちは、少年を取りまいてききまし

た。

「あの、桃ももの木きのある家いえへまいりますよ。」

「あ、重じゆうちゃんの家いえだ。」

子供こどもたちは、なんと思おもったか、喜よろこんで、手てをたたきました。

「もしきたら、ここへも寄より。」と、先せん生せいが、いいました。

「みんなが、あぶないといえますから、早はやくこの家うちをお移うつしなさい。」と、少しょう年ねんがい

うと、

「はっ、はっ。」と、先せん生せいが、笑わらいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「薬売《くすりう》りの少年《しょうねん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

薬売りの少年

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>